

免疫疾患抑制タンパク質

徳島大など発見 治療法開発も

免疫細胞が体の組織を異物と認識し攻撃する自己免疫疾患を抑えるタンパク質を徳島大と京都大、金沢大のグループがマウスで突き止め、7日付の米科学誌に発表し

こうした疾患には1型糖尿病や関節リウマチなどさまざまなものがあり、徳島大の岡崎拓教授

(免疫学)は「このタンパク質の機能を強化する薬を開発すれば、治療法開発につながる可能性

がある」としている。タンパク質は「LAG3」。血中のリンパ球の表面にあり、免疫反応を起す物質から受ける刺激を弱める働きを持つ。グループはこれまでに、リンパ球上のタンパク質「PD1」がLAG3と同様の働きをすることを発見。PD1の遺伝子を欠損したマウスを作製したところ、心臓の筋

肉に炎症が起きる自己免疫性の心筋炎で死んだマウスと死ななかったものがあった。死んだマウスはLAG3を作る遺伝子が変異し、LAG3タンパク質が不完全で、機能しないことが分かった。LAG3の遺伝子だけを欠損させても症状は出ないためPD1などほかの物質とともに免疫反応を抑制するとみられる。